

高橋 喜七郎 さん 氏

ひと



「三つの「革命」に立ち会った。90年、一等書記官として赴任していたイランでイスラム革命に遭遇。91年には公使としてソ連崩壊を目の当たりに

し、ウクライナ大使だった04年には、大統領選挙のやり直しで野党が政権を奪ったオレシシ革命が起きた。

仙台東出身。故郷の戦国大名伊達政宗の家臣で、慶長遣欧使節を率いてスペイン、ローマに渡った支倉常長を「外交の先人」と仰ぐ。大使館にこもらず、現地の人と触れあ

るのが信条。外務省内では「芯の強い行動派」と評される。「その国に愛情を持って接すること。日本の尺度で物を見ることは絶対駄目だ」。韓国駐在中の3年間、日本に残した高校生の息子に送った手紙は、91年に「息子への手紙」という本にまとめられ、日韓でベストセラーになった。

昨年11月、大阪担当大使に起用された際、京都や神戸の人にも親近感を持って話し、外務省首脳に呼び止まり、関西担当大使と名前を告げた。「オレは関西が主を握る手依いがしたい」。関西にある各国の総領事館や多国籍体と情報交換をする毎日だ。

関西の政財界は体面が主で、国首脳会議がサミットに名乗りをあげている。日本が環境問題や安全保障から取り組むのが、関西から世界に提言する構想力を示している」と高橋を評する。

文 伊藤 厚志
写真 田村 尚子